春海を求めて三十年

安　田　辰　馬*

1. いま，試みに家蔵の「天文月報」のバックナンバーを繰りひろげてみると，“天文方代々記”を始め旧幕時代の貴重な記録や暦算に関する業績について日本天文学会の諸先達がいち早く注目し攻究を進めておられて，まさに開拓者的なご努力のあとが窺えるのである．当時の私なども深き感銘をもってその諸論作に学んだものである．

更に，昭和の初年頃になると，新城新蔵博士の“東洋天文学史研究”，上田穣先生の“石氏星経の研究”，飯島忠夫教授の“支那古代史論”などの勝れた研究著作が相次いで刊行され，特に新城，飯島両博士の東洋天文学の源流に関する論争は，当時わが国における“三大学術論争”の一つに数えられ，ひろく識者の注目をあつめたものである．このような諸著述によって，私自身の最も学び得た一つは，わが国古来の“星図”と，その源流に関しての知識であった．“渋川春海”の名が身近かに感じられてきたのも，たしかその頃からのことであり，興のおもむくままに，大槻如電の“新撰洋学年表”，在野の篤学者小野清翁の“天文要覧”，西川如見の遺著などを座右に備えるに努め，関係文献検索のため帝国学士院のご厚意により同院刊行の“和算図書目録”一巻の寄贈をうけた感銘は忘れ得ない．菊判八百余頁のこの目録の収載により“春海”関係の文献の所在に関し得るところが多く，この意味においても，八十余歳の高齢をもって，かかる難事業に当られた岡本則録翁に畏敬の念を禁じ得なかった．

2. その頃，神田茂先生が「天文月報」の編集を担当され，特に“日本天文学史”関係の分野について先駆的な仕事を始められた．“日本天文史料綜覧”及び“日本天文史料”など真に稀有な大編著を公けにされると共に，日本天文学会会員のこの方面に関する調査研究等をも「天文月報」に紹介する労をとられた．当時の“月報”を見ると，その間の消息なり，成果がよく窺われる．たまたま，わが国最古の学校の一つといわれる“足利学校”に現存する邦製古天球儀について神田先生の指教を仰いだことが機縁となって，爾来私自身幾個かの邦製古天球儀について実地に調査する好運に恵まれ，その間特に神田　茂，上田　穣，秋岡武次郎諸先生の指教をいただいた．足利学校，東京帝室博物館，京大附属図書館，徳島の小出家，神宮徴古館などの古典球儀に関する一連の“報文”はその記録である．そして，このような仕事を進めるに伴い，“渋川春海”についての関心が益々たかまってくるのであるが，当時としては，遠藤利貞遺著“増修日本数学史”の記載や学士院の記録などに多くを頼るほかなかった．ましてやそれに関する“星図”なども各地の古書店その他を漁り歩き個人的に購求せざるを得なかった．高知に公務出張したとき，すでに珍本とされていた“秦山集”を二組知友の厚意で入手し，その一組を神田先生に贈ったところ，先生は早速その中から貴重な“記録”を発見された一，というよろこびもあった．またその頃，東京科学博物館の開館一周年を記念して開催された“江戸時代の科学展”は銘記さるべき行事であったが，特にその“天文暦術”部門には“春海”関係の資料が相当見受けられ印象的であった．その後，西内雅氏著“渋川春海の研究”一巻が刊行されて得るところ多く，更に神田　茂先生が「科学史研究」第一号〔昭和 16 年 11 月刊〕に“渋川家に関する資料”と題する長編を寄せられ，諸書に散見する渋川家関係資料を取纒め，更に墓地，遺族等について知り得た資料を併せ記し詳細な発表をなされた．今日“春海”関係の系譜について学ぶため不可欠の玉編といい得よう．なお，林鶴一博士の“春海”に関する論述（「和算研究集録」参照）も逸し得ない文献である．

3. “東海道新幹線”の開設工事により“渋川家”代々の墓地にも改変を見るのではないか，と案じつつその現状を確認しておくため，神田，渡辺，村山諸先生などと共に東海寺墓地を訪ねたのは，昭和35年4月10日午後のことであったが，神田先生はその頃から既に“渋川春海 250 年”の記念行事のことを着想しておられたようであり，又仙台の平山　諦先生も同じ様に関心を示しておられた．このたび，広瀬秀雄，渡辺敏夫，中山　茂，関口直甫諸先生の御配意，ご企画と東京科学博物館のご協力のもとに日本天文学会主催により“渋川春海 250 年記念展”の開催を見ることは，特に，春海亜流の古天球儀の幾種かに直接ふれて以来 30 有余年，“春海”の真の姿を希求しつつある自分として，敬謝の念にたえない．ただ，広瀬先生のよき伴侶の一人として，斯道の研さんに精進し，献身してこられた今は亡き，前山仁郎先生にこの記念展に参加していただけないのは惜しみて余りあることである．　(40, 7, 10)

---

* 労働大臣官房